



Title	M. Arnoldのhumanism
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 105-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98966
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

M. Arnold の humanism

上 山 政 義

1945年に第二次世界大戦が終焉を告げたとき、我が国の識者の間において、残忍で殺伐な戦争を防止し、永遠の平和と自由を確保するためには、広く国民の心の中に humanism の精神を浸透させることが最も効果的な手段の一つと認められ、humanism についての論議がかってないほどに花を咲かせたのは誠に当然の成り行きであった。かくして humanism の本質を論じ、その歴史的発展の経緯を研究する過程において、諸外国の思想家や作家の中で humanism の旗幟を掲げて活躍をした人々の業績が日本の評論界に紹介されるに到ったのであるが、その際に Matthew Arnold (1822-88) の名は必ずしも主たる研究や論議の対象とはならなかったのが実状なのである。これはどの角度から考察しても不思議な現象であった理由として、深瀬基寛氏は次のように述べておられる。「アーノルドが単に数あるヒューマニストのうちの一人に留まるならば偶然の見残しという場合も考えられるが、事実においてアーノルドの占めている歴史的定位というものはゲーテ以来最大の最も完全なヒューマニストであり、また単に英文学の局部的世界においてのみ意味をもつ人物なのではなくて、古くはプラトン、キケロ、ピコ・デラ・ミランドラ、エラスムスを通して一貫して流動している西欧的ヒューマニズムの十九世紀後半における代表者の最大なるものとしてフランスのサント・ブーヴと肩を並べ、またその使命がアーノルド一代を以て終わっているのでもなく、今世紀に入ってアメリカの最大の文芸思潮をなした、バビット、モア、シャーマン等の「新ヒューマニズム」の直接の源泉をなし、イギリス本国においては今年(1948年)のノーベル賞の受賞者 T. S. エリオットにおいてその正継者を見出すという歴史的関係の中継的契機として立っている人物だからである」と。ところで、このよ

うに humanism を語る上において見逃すことのできない存在である Arnold の humanism とは一体どのような性格を具えたものであろうか。このことについては、同じく深瀬氏は次の通り定義を加えられる。「(承前) まず第一に詩人であること、第二に詩の批評家であることによって「一つの生き方」としての文学の使命への強大な確信においてはコウルリヂの直系に立ち、この自覚を一步も踏み外すことなくして、教育、社会、政治、宗教に対してまた一貫した自覚的立場に立っている。そこに成立する一種の「感性の統一」がアーノルドの本質なのであって、それはもはや十七世紀の「偉大なる両棲の人間」のヒューマニズムとはいえないとしても、十九世紀の条件の許す限りにおいて成立可能な最大の幅と奥行とを兼有する最も正純なヒューマニズムなのである。(中略) つまり、彼の本質はコウルリヂとともにまず「心臓に添うて感ずる」詩人であり、この詩人の感性が彼の社会批評、宗教批判を一貫するかたわらにおいて、それらの社会批評、宗教批判は文芸批評家の知性の弾力性に貫かれ、逆に彼の文芸批評は「人生をじっと全体としてみる」という有名な彼の人生理念によって貫かれているのである。これがアーノルドのヒューマニズムの本質である⁽²⁾」と。

さて、Arnold は “Poetry is a criticism of life.” という命題を掲げていたことは周知の事柄であって、それは今日までいろいろな批評家によって屢々引用されてきている。そして彼は自ら作詩をするに当って、この命題に即応し得るようあらゆる努力を惜しまなかったことは当然予想されるところであろう。「詩が人生の批評である。」と考えるからには、彼が胸中に抱く人生観なり世界観なりが彼の詩の随所に 織り込まれていなければならないわけである。そして彼の人生観や世界観の底流を形成するものが humanism の精神であるならば、言うまでもなく彼の詩には humanism の流れが脈々と波打っているべきはずである。この小論において、私は Arnold の humanism が彼の詩の中でどのように具現されているか、その一端を解明せんと試みるもので

あるが、ここで論じる humanism は、文学史上の所謂ヒューマンイズムの定義に限定されない広義のものであって、人間の安寧と幸福を希求し、真の人類愛に基づき精神を保持しようと努力する主義を意味していることを予め断っておきたい。

ところで、最近刊行された Albion の中で村松真一氏が“王者の悲歌——アーノルドの「棄てられし人魚のうた」”という論題の下に Arnold の詩集の中で佳作の一つに数えられている The Forsaken Merman についての研究を発表しておられる。同氏は論文の冒頭部分において、「概してマッシュュー・アーノルドの詩は、歌うよりも物語る傾向があると言われる。このことは、彼の代表作の中に物語詩又は物語風の詩がかなりあるという、形式的事情にもあらわれている。然しながら、彼の物語詩の中でも、処女詩集におさめられた「棄てられし人魚のうた」は、形式的には、人魚の口を通して物語るという形をとっていても、自由な、そして豊かな抒情性をもっていることは、誰しも感じることであろう。実際この詩を読むとき、人の世の女性に棄てられた人魚の悲しみが、すぐれて美しく、そして哀れに心に沁みるのである。いったい、この物語詩は何ゆえにこれ程哀れをさそうのであろうか。作者はどのように、この物語を構成したのであろうか。以下、この詩を原作に即して検討し、その魅力を、聊かなりとも解明してみたいと思う。⁽³⁾」と述べ、本文において第一節から順を追うて最終節に到るまでを、十数頁に亘って論述を続けている。その中で愛妻に捨てられた人魚とその子供たちの悲哀に満ち溢れた情感が、如何に鮮かな筆致を以て表現されているか、またそれに織り混ぜた自然描写の類稀れな技法が、どのように物語の雰囲気⁽³⁾の盛り上りに貢献しているかを、縷々分析解説を加えた後に、次の言葉でその稿を閉じておられる。「彼はえてして、詩的情熱に欠ける嫌いがあると言われる。しかし、この「棄てられし人魚のうた」においては、彼の想像はのびのびと自由に、そして抒情性豊かに展開され、少しも破綻を見せていない。詩の妙味は、凡ゆる芸術作品がそうであるように、虚実

皮膚の境に存する。アーノルドの詩ところは往々にして「冥」に即き易く、「虚」に遊べぬ傾きがあったであろうが、人魚と人の世のたをやめとの、この哀れな物語の虚構の中では、彼の詩ところは自由に羽搏いた。彼の詩人としての生涯で、これ程彼の情熱を盛るに適した器は少なかったのではあるまいか。⁽⁴⁾と。さて、この The Forsaken Merman は彼の詩集の中で Narrative Poems の部門に入れられて、すでにいろいろな評論家の間でかなり高く評価されてきたものである。そのようにこの詩が多くの読者に深い感銘を与えて洛陽の紙価を高めることのできた理由の一つとして、この詩に一貫して流れている humanism の精神を見逃すことはできないと思われる。試みに次の一節に注目してみよう。

Down, down, down!
Down to the depths of the sea!
She sits at her wheel in the humming town,
Singing most joyfully.
Hark what she sings: 'O joy, O joy,
For the humming street, and the child with its toy!
For the priest, and the bell and the holy well;
For the wheel where I spun,
And the blessed light of the sun!'
And so she sings her fill,
Singing most joyfully,
Till the spindle drops from her hand,
And the whizzing wheel stands still.
She steals to the window, and looks at the sand,
And over the sand at the sea;
And her eyes are set in a stare;
And anon there breaks a sigh,
And anon there drops a tear,
From a sorrow-clouded eye,

And a heart sorrow-laden,
 A long, long sigh;
 For the cold strange eyes of a little Mermaiden
 And the gleam of her golden hair.⁽⁵⁾

母を慕って声を限りに叫んでいる幼な子たちの呼び声に耳を藉さぬ妻には、最早人魚の許へ戻る意志のないことを知って、深海の棲息所へ降りて行こうと子供たちに呼びかけている人魚の胸中は察するに余りがある。海底での人魚との夫妻生活に別れを告げ、家で糸車を廻したり、教会で敬虔な祈禱を捧げたりして、昔と変わらぬ人間社会での営みを楽しんでいる妻の姿を見て、人魚の心には諦めの念が自ら湧き出してくる。もしこの詩がこのような場面を描くだけに終わっていたならば、それは単なる悲劇を歌ったに止まり、読者の心に一抹の哀愁感を残すに過ぎなかったと思われる。即ち、大人のための童話たるにふさわしい一挿話としての価値しか持ち得なかったであろう。この詩に豊かな生命力を吹き込み読者に深い感動を与えるものは、実に *She steals* 以下の10行なのである。人魚の妻は決して冷酷無情な女ではなかった。窓辺にそっと忍び寄って、大海原に凝視の目を注ぐとき、ほどなく悲しみに重く沈んだ心からの深い溜息が両唇の間から洩れ、悲しみに曇る目からは熱い涙が頬を伝って落ちて行く。女は思いを海中に残してきた愛しいみどり子の上に馳せるのである。ここに Arnold の humanism が力強く躍動しているとは言えないであろうか。万人すべてその立場を異にし、己れを以て他を推しはかることが如何に至難の業であるかを、我々は身に沁みて感じることが多い。皮相的な観察に頼って複雑多岐な人生の諸相を判断することは、思わぬ過誤を招くことになる。一見非情に感じられる行動も当事者にとっては止むに止まれぬ深刻な事情によるものであることが少なくないはずである。性善説を信じ、他人の行為に暖い眼差しを注ぐことがどのように人生を明るくすることであるかを、この詩は寓意として含んでいるのである。この詩を鑑賞した人の胸に、そこはかとなない人魚への憐愍の感情が湧くだけでなく、深い縁に結ばれてその妻となり母となった夫

や子供たちを棄てることを余儀なくされた女の境遇に対する同情の念が宿るならば、Arnold の作詩の意図の一つは達成されたと言えるに違いない。悲劇の主人公に対してのみならず、悲劇を生じさせた当事者に対してまでも限らない慈愛の情を与えることは、苦難に満ちた人生行路を勇氣と希望を胸に抱いて明るく邁進する最良の方法の一つと言い得るであろう。

さて、The Forsaken Merman においては、人魚を主人公に仕立てて、空想的な夢幻の世界を現実の人間生活とからませて人生の一断面を歌い上げたのであるが、To a Gipsy Child by the Sea-Shore 「浜辺のジブシーの子に寄せるうた」においては、主人公が現実の人間であるが故に、情感が一入深く滲み出ていると思われる。この詩については Tinker および Lowry の両氏は次の如く解説している。

“In the volume of 1849 the poem was followed by immediately by ‘The Hayswater Boat’ and ‘The Forsaken Merman,’ with which it seems to form a trio of poems in romantic mood. In these lines the gipsy makes his first appearance in the poetry of Arnold, and is here, as in ‘The Scholar-Gipsy,’ a solitary figure.”⁽⁶⁾

すなわち、この詩は浪漫的情緒を含んでいるという点で The Forsaken Merman と同一の範疇に属するわけである。ところでジブシーが登場するのは彼の詩においてはこれが最初であるが、彼がジブシーに関心を抱いた時期は速く少年時代に遡ることができる。このことに関連する前記の両氏の文を次に引用してみよう。

“The poet’s interest in gipsies probably began in boyhood, in the Lake District. The ‘wild outcasts of society’ must have been familiar to him in Wordsworth’s poem, ‘Gipsies,’ in the volume of 1807, and their availability for literary treatment of another sort in George Barrow’s *Zincali, or an account of the Gypsies in Spain* (1841) and *The Bible in Spain* (1843).

A boy's natural interest in gipsies must have been heightened by his journey with his father to Spain, in 1839, at the age of sixteen.⁽⁷⁾

16才という多感多情の思春期に父とスペインへ旅行して、さすらいの旅をつづけるジプシーの生活に強く心を打たれたことが、後年彼がジプシーを主人公とする詩を作る素地となったことは明らかである。諸行無常、転変極りない運命の十字架を背負ったのが人生の姿であってみれば、定住の地を持つ身でも寂莫の感に堪えられない時が少なくないであろう。まして行方定めぬ放浪を強いられるジプシーたちの宿命に思い到れば、万感胸に迫り心の痛むのを覚える人も数多いはずである。童話的色彩を織り込んだ *The Forsaken Merman* に比して、この詩が一段と高い次元の深さと幅を具えているのは、生ける悲劇の主人公であるジプシーに同情を寄せたものであることによると思われる。前記の両氏は、“A highly romantic view of the gipsy is found in the ‘Stanzas on a Gipsy by the Sea-Shore…’⁽⁸⁾”と述べ、この詩がジプシーを極めて浪漫的に眺めて歌ったものであることを指摘しているが、この詩を不朽の名作の一つとして今日尚お識者の注目を集めさせている所以は、この詩に一貫して流れている彼のジプシーに対する心からの隣愍の情に他ならないと言い得るであろう。

ところで、この詩が彼の詩集の中で今日の位置と形態をとるに到るまでの過程について、前記の両氏の解説を次に引用してみよう。

“The poem, altered slightly in diction, was reprinted in 1855. In 1869 it was classed as an elegy, and given a place between ‘*Rugby Chapel*’ and ‘*Requiescat*.’ The first stanza was cancelled, and the next four were written as follows: (詩は省略) On June 26, 1869, Arnold wrote to his mother, ‘I suppose I must change back the “Gipsy Child” to its old form, as no one seems to like the new one.’ Accordingly in the volume of 1877, the poem was restored pretty much to its

original form, and included among the group of Early Poems, where it was thenceforth permitted to remain.”⁽⁹⁾

この詩は Early Poems の中から一旦 Elegiac Poems に入れられ、さらに Early Poems に戻されて現在に到ったわけである。このことから明かなようにこの詩はいわゆるエレジーとしての要素を含んでいるのは言うまでもない。さて、一度 cancel されて再び挿入された the first stanza とはどのような内容のものであるかを次に紹介してみたい。

Who taught this pleading to unpractised eyes?

Who hid such import in an infant's gloom?

Who lent thee, child, this meditative guise?

Who mass'd, round that slight brow, these clouds of doom?⁽¹⁰⁾

世慣れぬ瞳にこの哀訴の眼差しを誰が教えしや。幼な児の憂愁の中にかくの如き意味を誰がかくせしや。子供よ、この沈思のよそおいを誰が汝に貸し与えしぞ。そのやせたる額のまわりに、この凶運の弱りを誰が集めしぞ。

この冒頭の一節を熟読翫味するならば、主人公がジブシーの大人ではなくて子供であることが詩の中にも哀愁感を一入深くさせているのに気づくはずである。純真無垢で天真爛漫であるべき幼児の目は明るく澄んでいるのが自然の姿である。然るに、その目に嘆願し哀訴する色が浮んでいるならば、我々はその心根を思いやって心から憐みを感じずにはいられないであろう。次にみどり子の陰鬱さの中に深い意味が隠されているという一行に、ジブシー族が課せられている悲劇的宿命が巧みに暗示されている。すなわち、この infant's gloom は、代々受け継がれてきた民族的遺産とも言いうるもので、幼児がこの世に生を享けたとき、すでにその目に宿っていたものなのである。さらに、第三行目の「物思いに沈むかの如き姿」に到っては、子供の悲惨な姿を余すところなく抉出したものと言うべきであろう。活気に溢れ発刺と躍動するのが本来の子供の天性であることを考えれば、meditative guise を身につけたジブ

シーの子供が如何なる日常生活を送っているかは火を見るよりも明らかなことである。また、first stanza の最後である第四行目は clouds of doom の語句がとくに読者の注目を惹くと思われる。doom (=evil destiny; miserable fate) を示す群雲が瘦せた小さい額に凝集しているならば、その子の辿る運命については、最早思い半ばを過ぎると言いうるのである。大にしては歴史の潮流を司どり、小にしては各個人の人生行路を定める 神の摂理 (Providence) が、このジブシーの子供の将来をどのようにさせるかは、誰の目にも手にとるように明瞭であろう。さて、この first stanza の四行があればこそ、second stanza に見られる海洋の描写が生命の力強い息吹きを与えられるのである。次にそれを引用してみよう。

Lo! sails that gleam a moment and are gone;
The swinging waters, and the cluster'd pier.
Not idly Earth and Ocean labour on,
Nor idly do these sea-birds hover near.⁽¹¹⁾

海洋においても、浜辺においても生の営みは休みなく続けられている、しかも活気をもって。ジブシーの子の淋しい姿がこの情景と対照されるとき、哀感は一きわ深く切なく我々の胸に迫るのである。

ところで、六十八行から成るこの詩の評価を高からしめている stanza の一つとして次の四行があると思われる。

Glooms that go deep as thine I have not known:
Moods of fantastic sadness, nothing worth.
Thy sorrow and thy calmness are thine own:
Glooms that enhance and glory this earth.⁽¹²⁾

第一行目において、「汝の憂愁ほど深いものを私は未だかつて知らぬ」と述べ、さらに第三行において、「汝のもつ悲哀と平静はほかならぬ汝自身のものののだ」と強調している。これらの敘述が第四行目の哲理の示す迫力をとくに有効適切なものとさせているのである。ただ単にジブシーの子の陰鬱さを強く

歌い上げるだけならば、修辭學的技法の巧みさを駆使することによって可能である。しかし、さらに一步を進めて思想的にも高度な内容を盛ることが Arnold の作詩の目的でってみれば、第四行目にこそ彼の真骨頂が顯示されていると言ふべきであろう。「この世を高からしめ、この世に栄光を与える憂愁」の一行に Arnold の万感の思いが凝結されているのである。すべてのものには表裏があり明暗がある。光明には陰影が沿うてその輝きを増す。不幸や悲哀と対照させることよって、幸福や歓喜が一段と光彩を放つのである。この事實は余りにも明々白々たるものであり、誰しも容易に理解し得ることである。然しながら、ジプシーたちの胸に宿る憂愁が我々の人生を崇高なものとし、この世に光輝を添えると歌ったのは何故であろうか。この命題の真意を解明することが Arnold がこの詩を作った意義の重要な一つを理解することであり、ひいては彼の人生観、世界観を伺い知るための一助ともなるはずである。物質文明の繁栄を誇示している社会にあっては、ややともすれば虚栄、虚飾を求めるのに浮き身をやつし、華美や奢侈に憧憬を感じている人が目につくようである。しかし、激しい闘争の後にいわゆる名利を博することが真の人生の幸福に通じるであろうか。そこには多くの疑問の余地が残されているはずである。このような社会に求められるべきものは、質実な精神文化の高揚でなければならない。厳しい修業の後に悟りを開いた名僧、隠者の存在は俗世間にとって一服の清涼剤以上の貴重な価値であろう。けれども、真に立派な社会とは、地味ながらも堅実に自己の本分を尽す人々で満ちた社会なのである。ところで、ジプシーの持つ gloom は単なる陰鬱に止まらず、一種の諦観を含むものであり、従って悟りを開いた枯淡の境地に一脈相通じる点があるものと、Arnold は考えたと思われる。それ故に、そのような憂愁を抱くジプシーの存在がこの浮世において、人々の心を崇高ならしめ、また世の中に光輝を与えると歌ったのではなかろうか。

さて、この詩を通読して感じることは、この詩が不朽の名作の中に数えられ、今日尚お読者の心を激しく感動させる所以の一つは、文字の上に表現され

てはいなくとも、自ら行間に滲み出ている彼のジプシーの子に寄せる慈愛の溢れた憐愍の情であり、ジプシー民族全体に対して抱く深い同情の念である。すなわち、Arnold の humanism が作詩にあたって心の底流を形成していたことが感知され、このことが、一読後に我々の胸に強い感銘を残す原因となっている。

以上は、主として To a Gipsy Child by the Sea-Shore を対象として、Arnold の humanism を考察してみたのであるが、彼の詩集には百数十編の詩が集められているので、それらの全体を通じた総合的な研究を、何れ稿を改めて公けにしたいと思う。

〔引用文献〕

- (1) 深瀬基寛著：「批評の建設のために」（南雲堂版）
- (2) 同上：PP. 49, 50
- (3) 京大英文学会編：Albion P. 19（村松真一執筆）
- (4) 同上：P. 33（村松真一執筆）
- (5) Tinker and Lowry 編：The Poetical Works of Matthew Arnold (Oxford University Press) P. 164
- (6) Tinker & Lowry：The Poetry of Matthew Arnold (Oxford University Press) P. 52
- (7) ibid. PP. 207, 208
- (8) ibid. P. 208
- (9) ibid. PP. 52, 53
- (10) Tinker & Lowry 編：The Poetical Works of Matthew Arnold (Oxford University Press) P.41
- (11) ibid. P. 42
- (12) ibid. P. 42

〔参考文献〕

- 深瀬基寛著：「批評の建設のために」（南雲堂版）
京大英文学会編：Albion〔王者の悲歌〕（村松真一執筆）